



支援員だより

発行者：山口県・公益財団法人山口県ひとつくり財団

もくじ

P 1～P 3

支援員研修会の開催結果

P 4 特定外来生物・セアカゴケグモについて



支援員研修会の開催結果

◇第1回研修会

- ・日 時：平成24年10月20日（土） 9：30～16：00
- ・場 所：秋吉台エコ・ミュージアム、秋吉台（長者ヶ原及び真名ヶ岳周辺）
- ・参加者：24名
- ・内 容

午前中は、自然観察指導員の田原義寛氏による「草原ふれあいプロジェクト」の講義と現地での観察会を行い、午後からは、秋吉台の真名ヶ岳周辺で自然解説者の中沢妙子さんと宮田文子さんの解説により秋の植物観察会を行った。

- 「草原ふれあいプロジェクト」については、必要性、活動等の概要、成果などについて講義があり、秋吉台を生き物でにぎわう草原にするためには草刈りを行うこと。ただし、ルールに従い、草刈り場所の選定や、刈った草を必ず持ち出すことなどが説明された。多くのボランティアが参加しているが、企業や地元小学校の参加もあること。長者ヶ原では、ヤブの草を刈り、樹木の量等の変化を観察しているが、今年は多くの花が咲いているとのこと。（ムラサキセンブリ等が増加）長者ヶ原に移動し、プロジェクトを実施している場所で、説明を聞きながら、遊歩道沿いに咲いている草花を観察した。また、コドラーを用いて、単位面積当たりの花の数を調べた。
- 真名ヶ岳周辺の植物観察会では、参加者は、配布した資料「秋に見られる草花」を見ながら、草花の名前を確認し、講師の説明を聞いていた。アキノキリンソウ、アキヨシアザミ、イヌタデ、ウメバチソウ、カワラナデシコ、サワヒヨドリ、シロヨメナ、センブリ、ノガリヤス、ヤマハッカなどが確認された。特に、リンドウやムラサキセンブリなどの目的としていた花を見つけ、喜ぶ参加者も見られた。



◇第2回研修会

- ・日 時：平成24年11月17日（土） 9：30～15：30
- ・場 所：岩国市中央公民館、岩国市城山国有林
- ・参加者：17名
- ・内 容

午前中は、錦川オオサンショウウオの会の白井啓二氏による「オオサンショウウオの保護活動等について」、山口森林管理事務所の田口秀美氏による「岩国市城山国有林について」の講義を行った。

午後からは、吉香公園に移動し森林インストラクターの橋本順子さんと金丸恵子さんの解説により、城山国有林（吉香公園から岩国城までの登山道周辺）での自然観察会を行った。

- オオサンショウウオは、錦川上流（宇佐川）で10年前から調査され、60～90cm程度のものが100匹以上確認されている。また、巣穴にいる幼体（15cm程度）も見つかっている。宇佐川には餌となる鮎やハヤが豊富である一方、堰堤があり、鮎やハヤが遡上しないことや、大量の土砂（20～30万㎡）が堆積し、生息状況は悪化していることから、餌が不足するなど痩せており、保護対策として餌を与えている。土砂の撤去等の対策が必要である。

日本では、中国山地等の水路（小川）で生息が確認されているが、宇佐川では清流に生息しており大変めずらしい。「錦川オオサンショウウオの会」を6月に立ち上げたが、地元の人はい少ない。今後、オオサンショウウオをどう保護していくかが課題。

- 岩国市の城山国有林について、現況や特徴、実施している治山事業、保安林等の管理や、「歴史を未来につなぐ森林づくり」として、檜皮の採取を行っているなどの説明があった。
- 城山国有林では、登山道を歩きながら広葉樹林（照葉樹林）を観察した。城山国有林には杉や松の木はほとんどなく、タブノキ（くすのき科）、コバンモチ（もちのき科）、リョウブ（りょうぶ科）、カゴノキ（くすのき科）シイモチ（もちのき科）、アカガシ（ぶな科）、アラカシ（ぶな科）、シリブカガシ（ぶな科）、ミミズバイ（はいのき科）、タカノツメ（うこぎ科）などの広葉樹が見られ、講師から木や葉の特徴などの説明を聞いた。特に、岩国城付近にある「フシノハアワブキ（あわぶき科）」は、城山国有林にしか見られない珍しい木であるとのことであった。また、オオゴキブリや冬虫夏草について説明を聞いた。



◇第3回研修会

- ・日 時：平成24年12月2日（日） 9：20～15：00
- ・場 所：山口県セミナーパーク
- ・参加者：30名
- ・内 容

午前中は、榎野川流域での自然再生活動等の取組について、榎野川河口域・干潟自然再生協議会会長代理（山口大学名誉教授）の浮田正夫氏による「やまぐちの豊かな流域づくり～榎野川河口干潟の再生活動について」、榎野川流域地域通貨・連携促進検討協議会副会長の吉光繁明氏による「森・川・海への思い～榎野川流域連携活動について」の事例発表を行った。午後は、NPO 法人森は海の恋人理事長畠山重篤氏による「海と共に生きる～震災復興と森は海の恋人運動について」の講演会を開催した。

○「やまぐちの豊かな流域づくり」～榎野川河口干潟の再生活動について～

山口県では、平成14年度に、「やまぐちの豊かな流域づくり構想」を策定し、榎野川流域で再生事業等を推進している。榎野川は上流から河口まで一体感を感じることができ、きれいな水が流れ、緑が豊かで、自然環境や文化にも恵まれ、上流・中流・下流の人々の交流も盛んな豊かな流域である。「もり・かわ・うみを育むふるさとの流域づくり」をキーワードに豊かな干潟等の復活をめざし、「榎野川河口干潟自然再生協議会」を設置し、自然再生事業を実施している。河口干潟ではアサリの漁獲がほとんどなくなっており、その原因は栄養分の減少や細かい泥分の増加など、複雑な問題がある。干潟の環境改善の取組として、南潟での人力による底質改善（耕作、竹柵づくり）や網をかけたナルトビエイの食害対策などを実施している。環境と調和し、豊かな生産性のある里山・里海の復活には、環境保全型農林水産業の回復を目指さなければならない。



○「森・川・海への思い」～榎野川流域連携活動について

榎野川の森・川・海の連携活動組織である「榎野川流域活性化交流会」は平成12年に、榎野川上流の環境について検討協議し、活動を行うことを目的として、漁協や森林組合が参加し、海岸清掃を実施した

ことから始まっており、以降、清掃活動や森林整備（間伐、植栽）等を実施している。

現在の森林は、木材価格の低迷、所有者の森林離れ、管理人の不在等から荒廃しており、地表には何も生えてなく土が流れ出ているスギ林や樹齢のわりに細い木が多く、自然に倒木しているものや台風で倒伏したものが多く見られる。さらに、竹が進入した人工林も多く、荒廃し、大雨などで広葉樹の大木が流出する箇所も見られる。

美しい森林、理想的な森林とは、豊富な下層植生が見られ、癒される森林、多面的機能を有する森林などであり、針葉樹広葉樹の混交林、朝日が差し込むスギ林、沢山の種類の落ち葉が見られる広葉樹林などである。

交流会の活動として、荒廃した水田の整備、広葉樹やモミジの植栽、間伐材を利用した魚礁づくり、エゴの森の整備や鮎の産卵場の造成、海岸清掃、榎野川河口干潟の耕耘、環境に関する勉強会などを実施している。活動の成果もあり、念願のアサリが採取された。また、榎野川流域の連携活動のシンボルとして源流の碑（間伐材で大内塗りの殿様と姫様を製作）を設置した。



○講演会「海と共に生きる」～震災復興と森は海の恋人運動について～

良い牡蠣を作るためには、海に流れ込む川が大事で、背景には山があり、流域の環境が大事であることを30年前に気づき、森と川と海を一緒に考えなければいけないと思い、それを人に伝えるために、漁師が山に木を植えることを始めた。「森は海の恋人」というスローガンを掲げ、平成元年より、落葉樹を約40種類植えており、植えた木は5～6万本になる。

また、流域の住民が、森と川と海が一つのものという意識を持たなければ川も海もきれいにならないと考え、平成2年より、流域の子供達を海に招き体験学習を続けており、参加した子供達は1万人を超えている。

子供から親へ伝わり、流域全体の住民達に、森と川と海が繋がっているという意識が芽生え始め、農家の人達も、農薬とか肥料を考えるようになり、環境保全型農業への切り替えが進んできて、川や海はだんだんと良くなってきた。地元の大川では鮭が6万匹も遡上し、湾には小魚も戻ってきた。川的环境は生き物に聞かぬのが一番良く、水生昆虫の調査では、大川には5～6年前より上流から下流まで同じ昆虫の生息が確認されており、流域全体が良くなっている。

取組には、理科的なメカニズムの研究やデータの的なものも必要で、植物と鉄分との関係を学んだ。

植物は、葉緑素（クロロフィル）を作るのに、鉄の力が必要。現在の海は極端な貧鉄であり、海水中の鉄濃度は1 L中に1 ngしかない。海水中には、N（窒素）・P（リン）はたくさんあるのに、植物プランクトンが少ない（増えない）海域がある。日本近海では植物プランクトンや鉄が多いが、それはどこから来るのか。ロシアと中国の境界にアムール川があり、その森林面積は日本の国土の5倍で、川の水はオホーツク海、千島列島を経て、三陸沖まで来ている。広葉樹等の葉が落ちて腐葉土ができ、土の中で分解されフミン酸が残り、このフミン酸に鉄を溶かす作用があり、鉄が水に溶け出す。もう一つの成分のフルボ酸が、溶け出した鉄を保護し、海まで鉄（フルボ酸鉄）を運び、植物プランクトンに鉄を提供する。森の中で作られたフルボ酸が、植物プランクトンが鉄を利用するのを助けることがわかった。

日本には、2級河川を含め、大小35,000本の河川があり、ほとんどにダムがある。ダムにはフルボ酸鉄が溜まっており、これを海に供給すれば海は豊かになる。海まで運ぶ土木技術の開発等を進めるべき。水産行政は、これまで、魚が獲れなくなると人工的に、稚魚を放流してきたが、稚魚を放流するだけで、海が豊かになるわけではない。



特定外来生物・セアカゴケグモについて

山口県自然保護課

外来生物とは、もともとその地域に生息していなかったにも関わらず、人間活動によって海外から入ってきた動物や植物のことです。外来生物法（正式には「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」）では、生態系、人の生命・身体、農林水産業に悪影響を与えるものを「特定外来生物」として環境省が指定し、飼育、栽培、保管、運搬、販売、輸入などが原則として禁止されています。

これまで、セアカゴケグモをはじめ105種類の特定外来生物が指定されています。

セアカゴケグモとは？

セアカゴケグモは、オーストラリア原産の小型のクモで、港湾地域又はそれに隣接する地域で多く発見されており、コンテナ等に付着して侵入してきた可能性があります。



国内では、貨物やコンテナ、建築資材、自動車等に営巣していたものが人為によって運ばれた結果、生息域が拡大されたものと考えられています。

これまで、西日本を中心に23府県で生息が確認されており、今年の9月には、広島県（大竹市）でも初めて発見されています。

攻撃性はありませんが、メスは毒を持っているため触ると咬まれることがあります。日本でも咬傷例が報告されており、ほとんどが軽症ですが、重症化することもあります。



セアカゴケグモを発見した場合は？

山口県内では、岩国航空基地内でのみ生息が確認されていますが、**万一、セアカゴケグモを発見された場合は、お近くの市町や県健康福祉センターに連絡をお願いします。**また、**絶対に素手で捕まえたり、触らないよう気をつけてください。**駆除するには、家庭用殺虫剤（ピレスロイド系）を用いるほか、熱湯をかける、靴で踏みつぶすなどの物理的な方法でも構いません。

一匹見つければ、周囲に潜んでいる可能性があります。日当たりの良い暖かい場所で、プランターの底やエアコンの室

外機、庭に置いた靴の中など、よく確認してください。

特徴

成熟したメスの体長は、**約0.7mm~1cm。**全体が光沢のある黒色で、**腹部の背面に目立った赤色の模様**がある。

支援員の皆さんには、セアカゴケグモに注意していただくのはもちろんですが、身近な方々への周知などご協力をお願いします。

発行元：（公財）山口県ひとづくり財団 県民学習部 環境学習推進センター
〒754-0893 山口市秋穂二島 1062 TEL 083-987-1110 FAX 083-987-1720
<http://eco.pref.yamaguchi.lg.jp/learning/>